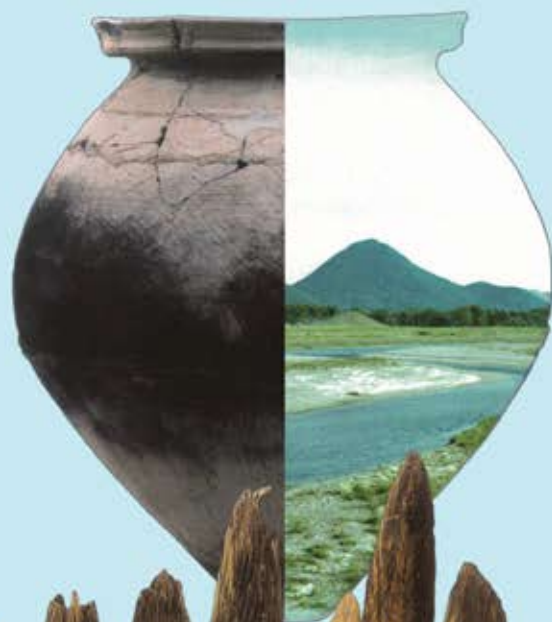


令和5年度秋季特別展

野洲川流域の弥生文化を探る!

2023.10/1 ⑨～12/17 ⑨



開催にあたって

服部遺跡では、弥生時代前期から稲作農耕が始まります。その後、稲作農耕は、次第に内陸部へと拠点を移し、中期には、地域共同体の発達を象徴する環濠集落が下之郷遺跡に、後期になると、クニの政治中枢とされる大型建物群が伊勢遺跡に出現します。

野洲川の形成した沃野に営まれた守山の弥生集落は、稲作を契機に、ムラからクニへと統合に向かい、遂には原始国家誕生の揺籃期に達する弥生社会の生成発展を端的に語ることができます。

今回の秋季特別展は、伊勢遺跡史跡公園の供用が開始されることに伴い、野洲川流域に花開いた弥生文化を理解していただくために開催いたしました。

なお、本紙は展示解説の一助として作成したのですが、必ずしも展示に沿った記載内容でないことをご了承ください。

令和5(2023)年10月1日

稲作のはじまり

稲作農耕は、いつ、どのようにして始まったのでしょうか。約1万年前の中国では、黄河流域と長江流域で異なった農耕文化がおこります。黄河流域で始まったのはアワ・キビ農耕で、約5千年前に朝鮮半島南部にまで伝わります。日本の縄文時代晩期の遺跡からヒョウタンやマメ類などが出土することから、日本列島にも伝わっていたと考えられています。

一方の長江上中流域では、稲作(水稻農耕)が始まり、その文化は次第に東アジア周辺地域に広がっていきます。日本列島へは、およそ2,900年前の縄文時代晩期に朝鮮半島からの渡来人によって北部九州にもたらされたと考えられるようになりました。



服部遺跡で検出された水田跡

昭和54年(1979)の服部遺跡の調査で、弥生時代前期の水田跡が見つかりました。野洲川流域での稲作文化の始まりです。見つかった水田は、登呂遺跡や大中の湖南遺跡で知ることのできる広い水田のイメージとは異なり、「ミニ水田」と形容された小区画水田だったので注目を集めました。初期の稲作は、労力を費やすことの少ない低湿地を水田に見たてて始まったと考えられ、そのため、稲の生育に欠かせない水を万遍なく張るために、微妙な地形の傾斜にそって畦を設けた結果、ミニ水田が誕生したのです。

北部九州で始まった当初の稲作は、古代かと思ふような水田で行われていました。しかし、東方への波及の過程で、省力化が図れる自然地形に畦を設けた水田で、道具も丁寧に磨きあげることなく、機能本位を優先させた大陸系磨製石器が使われました。

このような柔軟な選択によって、一旦、北部九州で定着した稲作文化は日本列島を東漸し、数百年かけて野洲川流域に到達します。弥生時代の始まりです。



弥生時代の稲刈り風景(守山市誌考古編掲載図)

集落の展開

守山市内では、弥生時代前期の水田跡が見つかった服部遺跡のほか、小津浜遺跡(杉江・山賀町)や赤野井湾遺跡(赤野井町)、中島遺跡(三宅町)で遠賀川式土器が見つかっていて、稲作を始めていた遺跡と考えられています。それは、遠賀川式土器が稲作とともに北部九州から西日本一帯に広がった土器で、稲作が行われていたことの指標になっているからです。

初期の稲作が始まった遺跡の多くは琵琶湖岸近くに位置していて、灌漑の必要がない場所が選ばれたと推測することができます。

しかし、このような地形での稲作は、慢性的な排水障害による生産性の低さと水害のリスクが絶えずつきまといます。



野洲川流域の弥生時代の集落遺跡

遠賀川式土器の分布と各地の土器



弥生時代の食文化

稲作によって、自然の恵みに食料を依存する生活から農耕によって自ら食料を生産していく社会へと変わっていきます。

下之郷遺跡では、弥生時代の食文化を考えるうえで参考になる遺物や動植物遺体が出土しています。稲モミのDNA分析の結果では、その後の他遺跡の分析も踏まえ、日本列島には、水稲栽培の温帯ジャポニカと陸稲の熱帯ジャポニカが混じった状態で伝わってきたことがわかりました。現在の日本では、温帯ジャポニカ種が水田稲作されていますが、おそらく古代に淘汰された結果だと考えられます。

また、多様な動植物遺体の中でも、フナの鯉蓋や歯が大量に出土しています。産卵期に琵琶湖から遡上する習性のあるフナなどの淡水魚は計算できるたんぱく源だったのでしょ。

温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカの草姿とモミ



杓子未製品・盤・高坏(下之郷遺跡出土)

そのようなことから、ムラは次第に湖岸縁から離れ、内陸部に活動範囲を広げていきます。その過程で地域的なまとまりが促進され、中期末には、下之郷遺跡に大規模な拠点集落である環濠集落が出現します。

そして、弥生時代後期の伊勢遺跡の時代になると、それまでの「ムラ」から「クニ」と形容できる領域にまでまとまりを見せるようになります。

弥生時代前期の服部遺跡、中期の下之郷遺跡、さらに後期の伊勢遺跡からは、弥生社会の発展過程を辿ることができます。

弥生時代の野洲川流域では、稲作農耕を生業としながらも、縄文時代さながらの食料獲得のための漁撈や狩猟採集が繰り返され、食生活を補っていたことがわかります。

環濠から出土した長柄杓子の未製品は、青谷上寺地遺跡で出土した個人使用のスプーンではなく、食べ物を容器からうつすためのもので、丸くて深いものや浅く掬うタイプなどその形状にバリエーションが見られます。当時の長柄の杓子一揃えの製作途上だと解釈できます。

墓といのり

服部遺跡の発掘調査では、弥生時代中期に連綿と築かれた360基以上の方形周溝墓群が見つかり注目を集めました。

方形周溝墓とは、周囲を方形の溝で囲んだ掘り巡らせた墳丘に木棺を収め死者を葬る墓です。弥生時代前期に近畿地方で築かれはじめ、その後、日本各地に広がりました。

当初は、方形周溝墓は首長の墓と考えられていましたが、現在では、血縁関係のある集団が代々築いた家族墓、あるいは血族だけが葬られた同世代性の高い墓ではないかと考えられています。

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて、野洲川流域では、方形周溝墓の周溝の一边が途切れたり、八の字型に開いたり、合形状に溝が回り前方部をつくり出すなどの形をした前方後方型周溝墓



服部遺跡の方形周溝墓群

が出現します。

従来の方形周溝墓とは違う形態の墓の出現は農耕社会が生み出した階層差を反映しているもので、その格差は古墳時代の首長古墳につながっていきます。

方形周溝墓や前方後方型周溝墓からは埋葬者への供献土器が出土しています。弥生社会の葬送儀礼などの精神文化を考えることができる資料です。



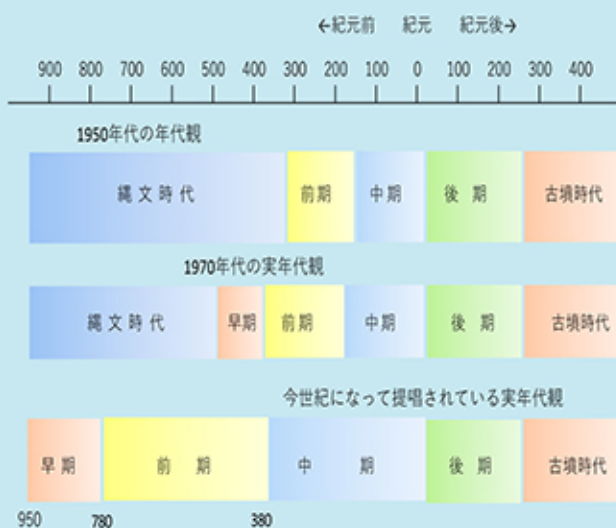
服部遺跡の方形周溝墓出土土器(左)・福野田東遺跡の前方後方型周溝墓出土土器(右)

弥生時代の実年代

かつて、弥生時代は紀元前3世紀頃に始まり、紀元3世紀頃まで続いたと考えられていました。しかし、その後の北部九州での発掘調査成果によって、弥生時代の始まりが紀元前4～5世紀に遡り、そして近年、AMS法という精度の高い炭素14年代測定法値と年輪年代測定の結果から、弥生時代の始まりは更に遡り紀元前10世紀とする説が唱えられています。

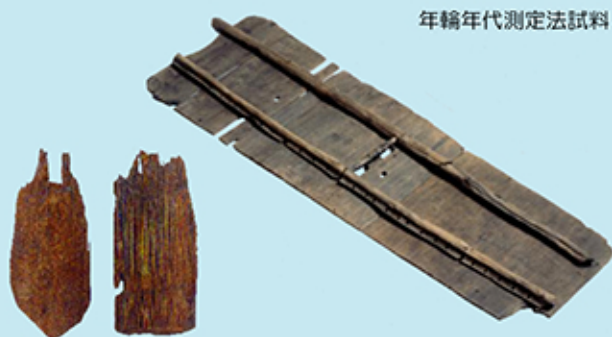
ここでは、稲作の開始をもって弥生時代の始まりと定義してありますが、紀元前10世紀という年代は北部九州の弥生時代の始まりであって、野洲川流域では、およそ2500年前頃に琵琶湖岸で稲作が始まったと考えられます。

さて、年輪年代測定は、気象条件による樹木の年輪幅の広狭変動に着目して、年代を調べる手法です。



弥生時代の実年代観の移り変わり

年輪年代測定法試料



二ノ畦・横枕遺跡井戸杵材

下之郷遺跡桶形木製品

守山市内では、二ノ畦・横枕遺跡の井戸杵材を年輪年代測定にかけたところ、紀元前60年と紀元前97年という結果が出ました。その後、下之郷遺跡出土の桶と考えられる木製品の測定値も紀元前220年代が出ています。

従来、弥生時代中期末の土器の実年代については、紀元後50～100年頃と考えられていましたが、少なくとも60～100年は遡ることを示唆していて、今日提案されている実年代を予見したと言えるでしょう。